

編集後記

昨年は5月に元号が改元され、平成から令和へ新たな時代の幕開けとなる1年がスタートしました。明るい話題では、東京オリンピック・パラリンピックイヤーでの活躍を予見するかのように、スポーツ界ではラグビーワールドカップでのジャパンチームの活躍が光りました。都心にはオリンピック・パラリンピックで使用する新国立競技場をはじめ、多くの競技施設も完成し、先端的な建築がお披露目されつつあります。きっと新たな環境設備技術も紹介され、話題を呼ぶことでしょう。その一方で、9月に台風15号が、引き続き10月には台風19号が列島に上陸し、暴風による家屋等への被害、豪雨による河川の増水と氾濫を招き、各地で甚大な被害をもたらしました。もはや、建物単体での災害対策ではなく、地域・都市レベルで総合的な災害対策を講じなくてはならない時代であることを痛切に感じました。加えて、昨年末にはスペインのマドリードで第25回国連気候変動温暖化枠組条約締約国会議(COP25)が開催されましたが、パリ協定のルールについて、各国の足並みがそろわず合意できず閉幕しました。地球温暖化においても世界各国はなかなかワンチームになれません。自然災害対策や地球温暖化対策への貢献できる本研究所における建築・環境設備分野の取り組みは、ささやかな活動ですが、益々、重要なものになってきます。

さて、本号はそんな新たな時代を語った遠藤所員の巻頭言から始まり、研究論文では、所員の指導下にある大学院生の研究論文が2編投稿されました。このように、若い世代が、積極的に審査論文作成に取り組んでいることは、大変結構なことだと思います。加えて、新任の中村所員からは、恩師の高橋健彦顧問の意思を継承した戸建住宅基礎の接地効果に関する技術論文が投稿されました。次号では是非、研究論文として、拡充し仕上げて頂きたいと期待します。また、総説では、李所員が学生の引率を兼ねて参加した韓国建築学会の様子が報告されています。筆者も同行しましたが、李所員の国際感覚を学ぶとともに、学生の啓発にはとても良い学びの場となりました。今後も広く展開して頂きたいと思います。同時に、例年のCIBW062国際会議は、オーストラリアのメルボルンで開催され、世界一水と空気が美味しいと言われるタスマニアへのテクニカルビジットも大変良い経験になりました。呉所員の報告による空気調和・衛生工学会での技術展示の様子、恒例の環境設備友の会の開催の報告も、毎号継承されつつあります。

新元号が改まり、新たな気分で研究所活動もスタートさせたいと思います。活発な研究活動が続くことを期待したいと思います。

所長 大塚雅之



ホバートの港（タスマニア）



ホバート貯水池ダム（タスマニア）